

「間身体性」の近さと隔たり

— 「間身体性」の倫理学の構想（2） —

La proximité et la distance de l'intercorporéité transcendante

: une idée pour l'éthique fondée sur l'intercorporéité (2)

坂本 秀夫

SAKAMOTO Hideo

Résumé

Cet article aborde la question de la possibilité d'accéder à l'intercorporéité transcendante sur laquelle se produit la signifiante dans le registre le plus archaïque de la conscience. Comme base ultime de la phénoménalisation du phénomène, cette incorporéité demeure toujours infigurable et indéterminable, ce qui empêche le langage et l'imagination d'y pénétrer, car ils ne fonctionnent pas sans transposer l'infigurable en image déjà déterminée. La possibilité d'appréhender cette base inapparente se donne par les notions de «*perceptive Phantasie*» chez E. Husserl et de «*Phantasieleib*» chez M. Richir. La notion husserlienne nous permet de percevoir, *du dedans*, la vie infigurable du corps vivant d'autrui, mais cette vie intérieure n'apparaît que comme *Phantasieleib* dans la *phantasia* délivrée des actes positionnels de l'imagination. Tout en faisant apparaître les phénomènes, l'intercorporéité elle-même n'apparaît pas en tant qu'elle apparaît en image, et elle apparaît en tant qu'elle n'apparaît pas dans une telle transposition en image. Voilà le paradoxe : la proximité et la distance de l'intercorporéité transcendante.

はじめに

本稿は、前稿（坂本 [2017]）において超越論的間主観性および倫理の基盤をなすと考察した超越論的間身体性へ接近する方途を探る。この基盤は意識の最古層で現象の現出を可能にする意味生成の領域であるが、それ自体が直接現出することはない。この形象化不可能な領域は形象化を許さぬがゆえに、言語および像力によって近づくことはできない。本稿は E.フッサールの「ファンタシア (Phan-

tasie)¹⁾ 論と M.リシールの「空想身体」論を手掛かりに、フッサールの像意識論を身体論として読み解くことによって、そこへ接近する可能性を探る。問いの端緒は「他者身体」の構成にある。そこでまずフッサールが遭遇した他者構成論のアポリアを確認し（第Ⅰ部）、次いでその像意識論においてファントム/ファンタシアが果たす働きの重要性を剔抉する（第Ⅱ部）。最後に「知覚的空想」の働きによって「超越論的間身体性」の位相が垣間見られる機制を捉える（第Ⅲ部）。超越論的間身体性の現れと隠れの逆説が結論として示されるであろう。

I フッサール他者構成論のアポリア——共現前と感情移入

フッサールにおける他者経験の志向分析において鍵概念をなすのは「共現前」と「感情移入」である。これらの概念を用いて「類比化統覚」により他者身体は構成されるのだが、そこに現れる他者とは結局「私の一変様」でしかないとしてフッサールは批判された。まずは、その概要を確認しておこう。

1 共現前と感情移入

表象作用はその統握形式の違いから「現在化 (Gegenwärtigung)」と「準現在化 (Vergegenwärtigung)」とに分けられる。現在化とは対象をそこに現前するものとして直観的に、ありありと呈示する働きであり、「知覚 (Wahrnehmung)」がこれに属する。知覚は外的事物に触発された「感覚 (Empfindung)」をその内容とし、経験の原様態として明証性の根拠をなす。これに対し、準現在化とは現前しない対象を思い浮かべる働きであり、対象を過去に実在した事物あるいは出来事として措定する想起あるいは記憶 (Erinnerung) と、対象を実在するものとしては措定せずに自由に思い描くファンタシアがこれに属する。

今知覚されている馴染みの家の正面は「現前 (Präsentation)」しているが、その背後や内部は見えない。しかし視点を移動すれば背後や内部も知覚され現前するだろう。馴染みの家は、正面とともにその背面や内部も間接的に「共現前 (Appräsentation)」しているのである。共現前が可能であるのは知覚対象が既知の類型をその地平としているからである。もしも家の類型に収まらない未知の事物の知覚であれば、現れるのはその正面だけで、その背面も内部も共現前しない。共現前は、準現在化に属する。現在化 (知覚) には準現在化 (記憶、想起、予期、ファンタシア) の地平がつねに伴っているのである。

事物の経験において共現前は知覚によって確認できるが、他者の共現前を知覚によって確認することはできない。知覚できるのは私の身体に類似した「物体 (Körper)」でしかない。他者の「身体 (Leib)」もその体験も、ともに私には直接に与えられてはいないからである (I, 一九五)。かくして事物経験

と異なり、他者の身体の内的生を直観的に確認することは原理的に排除されている。にもかかわらず、「私は他者をこの世界に対する主観として経験している」（同書一六五）とすれば、他者はいかなる志向性において解明されうるのだろうか。

自己と他者はすでに出来上がった社会的秩序によって繋がれている。しかし経験的次元に属するすでに出来上がった社会的秩序から出発する場合、自己と他者は第三者の視点から捉えられることになる。そうした外的視点からでは自己と他者との等根源性と非対称性という自他関係に独特の特徴は見失われてしまうだろう。それゆえフッサールは他者身体の直接経験の考察という内的視点から出発する。とはいえ、いかなる経験もその全体性においては自己固有のものではありえない。例えば、言語習得に見られるように、そこにはつねに他者に由来する成分が含まれているからである。自己固有の経験には、つねにすでにある他性が含まれているのである。それゆえ自己に浸透しているこの他性から自己を分離して画定することが求められる。ここに「私の超越論的自己固有領域への還元」（同書一六八）の必然性があったといえる。この還元によって私に「異他なるもの（Fremdes）」はすべて捨象され、超越論的に還元された「自己固有領域（Eigenheitssphäre）」において他者経験が解明されるのである。

この領域において、一つの物体（Körper）が際立って現れ、それが私の身体（Leib）との類似によって、私の身体と「対化（Paarung）」する。対化という「受動的綜合の一つの根源的形式」（同書二〇二）によって対象的な意味が交互に呼び覚まされ、対をなすものにおいて意味の転移が行われ、他者の身体が構成されるというのである。

私の身体は、世界の中核に位置する絶対的の零点として「ここ」という様態で、他方、他者の身体は「そこ」という様態で、与えられている。「ここ」と「そこ」は相互排他的であり、同時に成立しえない。しかし他者の身体は「あたかもわたしがそこにいるかのように（wie wenn ich dort wäre）」という「共現前（Appräsentation）」の様態をもって私の知覚に与えられ、いわゆる「感情移入（Einfühlung）」によって他者身体の内的生は捉えられるのだという。フッサールにおける他者経験の要諦をなすのは、この「共現前」と「感情移入」である。

2 私の自己の「一変様」としての他者

K.ヘルトはこのような他者経験の解明を批判する（ヘルト[1986],178ff.）。他者の共現前の様態は文法的には「非現実の接続法（als ob ich dort wäre）」と「可能の接続法（wenn ich dort wäre）」の「混濁（Kontamination）」だからである。「非現実」の様態はファンタシア（Phantasie）によって、「可能（潜在的能力）」の様態は想起（Erinnerung）によって与えられる。ファンタシアによって第一の絶対的「ここ」（私の身体）と、第二の絶対的「ここ」（共現前する他者の身体）との同時性が確保され、想起によって両者の区別が与えられる。しかし、想起が「いま」より以前の時間的変化を含む限り、私の身体と他者の身体の同時性は成立しえないからである。

自己の固有領域と異なるものとの領域を明確に区分し、前者から出発したとき、フッサールは他者の他者性を見失ってしまったのだろうか(リクール[1996],441)。「類比化統覚」の失敗は、フッサールが他者をもう一人の私としてしか考えなかったからだろうか(同書四〇二)。「他者は、現象学的には私の自己の<変様 (Modifikation)>として現れるのだ」(I,二〇六)。自己の一変様としての他者認識、これがフッサールの他者経験論に対する典型的な批判であるといえる。はたして他者とは自己の一変様でしかないのだろうか。

II フッサールの像意識論——想像と空想

ファンタシアと想起の「混淆」、潜在性(potentiality)と非現実性の「意味の揺れ(fluctuation)」(Tengelyi[2004],101)。これは、なぜ、いかにして生じてきたのか。この問題をフッサールの像意識論(XXIII, Texte Nr.1 und 18)を中心に検討してみたい。

3 像意識における二重の抗争と相互浸透

フッサールは布伦ターノのファンタシア論に言及する(XXIII,8ff)。布伦ターノは、意識の本質を表象(Vorstellung)とし、表象作用と表象内容との間に志向的關係を見出した。知覚の内容は外的事物によって触発された感覚(Empfindung)であり、ファンタシアの内容は感覚の志向的変様としてのファンタスマ(Phantasma)に見出される。それゆえ布伦ターノにおいては、知覚とファンタシアの区別は本質的差異ではなく、程度(強度)の差異でしかない。原様態としての知覚は外的対象を直観し措定するが、直観できる外的対象が欠けているファンタシアは非直観的、非措定的である。それゆえファンタシアとは不完全な知覚でしかないという²(ibid.,92ff.; Brentano[1959], 85f.)。

布伦ターノは知覚とファンタシアの差異を意識内容に見出したが、フッサールはそれを意識への現出様式のうちに求める。知覚の内容が感覚であり、ファンタシアの内容が感覚の志向的変様であるとするれば、知覚とファンタシアとの差異は両者の現出内容にあるのではなく、その現出様式にあるといわねばならないからである。すなわち、知覚において対象は現実存在するものとして措定され現前するのに対し、ファンタシアの対象は非現実的であるがゆえに措定しえないのである。それではファンタシアによって像を形成する意識はいかにして構成されるのだろうか。

フッサールによれば、像を形成する「像意識(Bildbewusstsein)」は「像物体(physisches Bild, Bild-ding)」「像客体(Bildobjekt)」「像主題(Bildsujet)」の三契機から成立する。「像物体」は、キャンパス、塗料、額縁などの物質的素材を、「像客体」はキャンパス上に色彩と構図によって描かれた画像を指す。「像主題」は、像客体によって模像された(abgebildet)現実存在する対象を指す。例えば、写真の場合、印画紙が「像物体」、印画紙上の写真が「像客体」、写真に写された実在の人物あるいは事

物が「像主題」に相当する (XXIII,18f.)。

「有体的に」現出する像物体は「通常の知覚 (Wahrnehmung)」によって統握されるが、それ自体はいまだ「像」ではない。像客体はそれが模倣する実在の人物事物 (像主題) とは異なる非現実的な「現れ」である。その意味では通常の知覚とは別様に、印画紙上に「知覚されて (perzeptiv) いる」³ (ibid.,489)。像客体によってはじめて「像」が成立し、像客体は像主題を「類似 (Ähnlichkeit)」によって呈示する。像物体は実在するものとして措定され「知覚 (Wahrnehmung)」されるが、像客体の知覚はそれを実在するものとしては措定していない。それはいわば中和化された知覚なのである⁴。

像客体は二重の「抗争 (Widerstreit)」によって現出する。像物体の知覚 (Wahrnehmung) と像客体の知覚 (Perzeption) とは抗争する。像客体は像物体に支えられて現出するが、像が現出するためには、像物体の知覚は像意識の背景に退かねばならない (ちょうどゲシュタルト図形における地と図の関係のように)。これが第一の抗争、すなわち像物体と像客体との間の抗争である。

像客体には他なるものを呈示する「模倣機能 (die abbildende Funktion)」 (ibid.,19) がある。この機能によって、例えば、私たちは写真を通して写された人物をありありと思ひ浮かべることができる。もしも写真の構図や陰影に注目するならば、人物像は背景に退き、写真自体が主題として前面に出てくるだろう。これが第二の抗争、すなわち像客体と像主題との間の抗争である。両者の間には類似ばかりでなく、むしろ差異もある。像のサイズは数センチ、色はモノトーンであり、実在する人物のそれとは異なる。像客体それ自体は現実に存在するものとして措定されてはいない。それゆえ単なる像としての像客体は「非現実性」あるいは「無 (Nichts)」 (ibid.,22) として性格づけられる。

4 想像と空想

像意識は形象化の仕方によって想像力 (Imagination) と空想 (Phantasie) とに二分される。絵画や写真のように物理的材質に支持されて成立する像の場合、そこで機能しているのが想像力であり、物理的支持物がないがゆえに像客体が介入せず、内的表象にしか関わらない場合、そこで機能しているのは空想である⁵ (ibid.,21; Schnell[2007],124)。例えば、絵画に描かれたケンタウルスは想像だが、物理的支持物なしに心のなかに思い浮かぶケンタウルスは単なる空想である。定義上、像客体の有無によって両者の区別は成立するが、しかしつねに判然と区別できるわけではない。想像と空想は抗争するばかりでなく、相互に浸透してもいるからである。例えば、「ケンタウルス」を単に空想する場合でさえ、私たちはすでに「人間の上半身」と「馬の下半身」という伝統的に想像された像客体の合成によって「ケンタウルス」を思い浮かべている。ここでは間主観的な意味の歴史的沈殿から想像力の作用によって形成された「ケンタウルス」が空想として現出しているのである。

ブレンターノを批判してフッサールは知覚とファンタシアの差異を意識内容ではなく、その現出様式のうちに求めたのであった。それでは知覚とファンタシアの現出様式の差異はどこにあるのか。

(1) 知覚対象の現出様式—統一性

「知覚野」は、視覚や触覚などの様々な感性的契機が統一的に絡み合った場であり、そこにおいて対象は、「知覚の連関 (Zusammenhang)」ないし「連関からなる綜合の統一」(XXIII,61)のもとで現出する。知覚対象の統一性はこれによって保証されている。

(2) 想像対象の現出様式—恒常性

想像において対象は知覚対象の類比物として現れる。それゆえ想像対象には知覚対象と共通した現出の特徴が認められる。すなわち対象現出の「連続性」と「恒常性」(ibid.)である。

(3) 空想対象の現出様式—変幻自在性

これに対し、「空想事物 (Phantasieding) は知覚の内部に現れず、ある全く別の世界のなかで現れ、その世界は現実の現在に属する世界から完全に切り離されている」(ibid., 57f.)。それゆえ「空想野 (Phantasiefeld)」に現れる空想対象は知覚の「連関」には属さず、想像の「恒常性」からも逸脱している。ここに空想対象の現出の特徴がある。空想対象は、相互に連関を持たず、その現出は「プロテウスのように移り気 (proteuartig)」(ibid.,60)であり、「突然」、「非連続的」かつ「飛躍的」(ibid., 67)である。それゆえ空想対象の現出は以下のように特徴づけることができる(澤田 [2010],120f.)。

- a. 変幻自在性：一貫した連鎖、連関の欠如
- b. 非連続性：予期予可能性
- c. 間歇性：不安定な現在における間歇的な現出と消滅

これらの特性は空想作用が非志向的であることを示している。「想像力 (l'imagination) は一つの志向作用であり、その現象学的土台をなすのが非志向的なファンタシア (la phantasia) なのである」(Richir[2008a],204 n.4/三二九)。それゆえ空想は像に凝結することはありえない。すなわち空想野は形象化不可能なのである。

5 原所与性としてのファントム⁶

「知覚のなかではファンタシアの場合とちがって、対象は現実存在するものとして与えられている。ファンタシアにはファンタシアなりの対象のあたえられかたはあるけれども、その対象は現実的なものではなく、疑似現実の対象 (quasi-wirkliche Gegenstände)、かのようにの対象 (Gegenstände im Als-ob) である」(EU, 五七)。ファンタシアの内容は感覚の一変様としてのファンタスマであった。たとえ「かのように」の様態において与えられるにせよ、ファンタスマが感覚の変様である限り、感覚の占める原本的位置に揺るぎはない。「もっとも基本的なもの、他の一切を基礎づけるもの…もっとも直接的な経験、それは「外的知覚」(同書五四)であるからだ。ところが他方で、フッサールはいっそう根源的なものへと遡及するとき、感覚よりもさらに原本的なものに遭遇する。すなわち「ファントム (Phantom)」(IV, 二五)である。例えば、「鳴り響くヴァイオリンの音」は意識によって対象として統握されているが、しかし「<まだ一度も音を≪知覚≫したことがなく、したがって音

を独自の対象として把握したこともないような意識主観>にとっては、音という対象も対象として意識されることは不可能であろう」(IV,二六f.)。そのような意識には、「音を対象として統握するのではなく、ただ感覚するだけの作用があるはず」(同書)だという。それは「対象をまだ対象として統握していない感覚状態」(同書)、ヴァイオリンの音として原創設される以前の未規定な感覚であるといえる。「音に結びついた物理的実在性を捨象しても」持続し、「音の空間全体に鳴り響く」もの、これが「物質性として統握される層をまったくもたない、純粋な空間的所与性という意味でのファントム」(同書四四)である。「知覚の場合には、感覚的な諸性質をもたない<物体>は考えられないが、しかしファントムは物質性を組成する諸要素なしに原的に与えられている」(同書)。それゆえファントムは「物質的な実在性を備えたあらゆる事物対象の根底に伏在する対象」(同書二五)であり、「事物が事物であるためには、まずファントムという形で与えられていなければならず、これに<実在化的統握>ないしく<因果的統握>が加わることで物質的事物が構成される。…この意味でファントムは事物の<原所与性 (Urgegebenheit)>である」⁷ (吉川[2003], 179)。

こうしてファントムが活性化され、物の物性の概念が具体化し、「実在化する統握(die realisierenden Auffassung)」(IV,五〇)によって対象への「超越」が可能となる。だが、そのとき、まさしく統握はファントムを超えてしまう。物質性の成素を持たない「原所与性」(XIII,350)としてのファントムは統握作用によって事物化される。この統握がファントムの原所与性を隠蔽してしまうのである。ここに「原所与性」へ、すなわち「事象そのもの」へ迫るためには、諸統握を遮断して原所与性であるファントムへ還帰する必然性がある。還元とは、事物から事物ファントムへの位相転換に他ならない。だが、物質的規定性をもたない不安定なファントムは、還元の後には気化して消えてしまわないか。

還元されるのは現実性 (Wirklichkeit)、すなわち物質性や信憑性であり、実在性 (Realität) ではない。真正な実在性をもつのは感覚だけであり (XXIII,77)、準現在化による感覚の変様としてのファンタスマは「非実在的」である。しかしファントムは感覚であるがゆえに実在的である。それゆえファントムの実在性は還元の後にも残り続ける⁸ (吉川[2003], 181)。

事物ばかりではない。身体もまた、それが身体であるためには、まずファントムとして構成されていなければならない。「知覚において身体 (Leib) はあらゆる事物 (Ding) と同じようにさしあたりはファントムとして構成され、より高次の段階において初めて、直観的な因果性をとおしてさまざまな性質をもった事物として構成される」(XIV,281/[2013]三二)。それでは「身体ファントム (das Phantom Leib)」(ibid.)はいかにして「完全な身体 (der volle Leib)」として原本的に知覚 (Wahrnehmung) されうるのだろうか。

根源的衝動的に進展するキネステーゼと並行して感覚も進展する。例えば、まだファントムとして構成されてはいない眼球運動によって視覚的所与が、眼を閉じれば触覚的所与が生じ、そこで視覚的ファントムおよび触覚的ファントムが構成され、統一される。「ファントムはもろもろの現出の統一である」(ibid.,282/三四)。どの身体部位もファントムとして、また「器官 (Organ)」としても構成

される。例えば、指は主観的に運動可能な「器官」としても構成される。ファントムとして構成された個々の身体部位が知覚器官として結びつき相次ぎ機能する場合、私の身体ファントム全体が構成される。キネステーゼの進展が「ファントムの実在化 (Realisierung eines Phantoms)」(ibid.,283/三五)において機能しているのである。

ファンタスマは感覚の変様であるが、ファントムはいまだ変様されていない「感覚されたもの」である。ファントムは「感覚的多様性を通じて…呈示される統一体」(IV, 四七)であるがゆえに、「感覚的多様性」に解消されることはない。しかしたとえ「物質的成素を欠く」とはいえ、ファントムそれ自体は「感覚」である限り、ノエシスの能動性は関与しえない。しかも原本的に与えられている「原所与性」である限り、ファントムを統一する作用はファントム自体のうちに求めることはできない。とすれば、ファントムの統一を成し遂げているのは、「隠れてはいるが、分析によって看取されうる構成的総合」(同書二五)、すなわち「受動的総合」に他ならない。

事物と身体は、まずファントムという形で与えられていなければならない、しかもファントムには単なる「感覚的多様性」に解消されない統一性がある。とすれば、ファントムは現象そのものの廃棄不可能な「基本的な枠組み」(同書四三)であるといわねばならない。この骨組みは、対象知覚の進展にともない知覚的志向性によって先行的に描出される「そのつどの空虚地平」と区別されるべき「空虚な可能性の地平」(XI, 三七)を意味する。「それについて明確に述べるなにもものもたない、たえず未規定のままであるような」(同書)空虚な可能性である。したがって、それがいかなる現実性でもない現象性の秩序として出現するのは、それと並存する「充実の可能性」、すなわち志向性によって先行的に描出された空虚な地平に、やがて現実性 (Wirklichkeit) として確証されうるという動機づけが破られたときである⁹ (吉川[2003], 182)。

感覚的多様に解消されないファントムの統一性、現象自体の可能性の条件であるかのような非現実的で完全に空虚な可能性としての枠組み、だがそのような捉えどころのないファントムをいかにして現象学者は捉えることができるというのか。

Ⅲ リシールの空想身体論——知覚的空想と建築術的位相転換

フッサールの他者経験の志向分析においては、共現前と感情移入による類比化統覚がその核心をなしていた。ここで他者身体の構成手続きにおいて空想作用の果たす役割を見ていきたい。

6 知覚的空想

「<他者性>という意味契機」をすべて遮断し、自己固有なものの世界へと還帰する「固有領域への還元」あるいは「原初的還元 (primordiale Reduktion)」(I, 二五五)をフッサールは遂行した。こ

の遮断は抽象的方法ではあるが、実際にはむしろ具体性の次元にある。それは「自我の具体性」(同書二〇六)、「具体的な我(エゴ)が絶え間なく生き生きと進行していく(純粹に受動的で、原本的な自己現出としての)自己経験」(同書二二九)への還帰だからである。還元におけるこの具体性は何を意味するのであろうか。

他者性の意味契機を遮断するためには、他者および自己の本質理解が前提されていなければならない。本質は形相的還元における想像による自由変更によって獲られる。したがって、原初的領域における「異他なる身体物体」という意味は、想像によって獲得されたはずである。だが、他者の身体物体構成において、想像による自由変更は具体的にどのようにして遂行されたのだろうか。フッサールはそれを共現前(想起)と感情移入(ファンタシア)によって解明した。想起は対象を過去のものとして措定し、ファンタシアは対象を実在的なものとしては措定せず、非現実的なものとして知覚(Perzeption)する。しかし対象措定も意味付与も言語が媒介する限り、すでに出来上がった意味によって規定されているはずである。

ところが原初的還元は、事象そのものがまさに現出するという意味生成の次元への還帰であった。それはこの意味生成の次元、すなわち想像の自由変更によって規定される以前の「野生の領域」(Tengelyi[2004],101 ff.)という具体性への還帰である。この具体相において意味の生成を可能にするもの、それは意識の深みにおいてつねにすでに機能している意識生の働きである。生成する意味を現前に図式化することが言語の働きであるとすれば、「野生の領域」に言語も想像力も踏み入ることはできない。それは言語や想像力によってはいまだ形象化しえぬ領域だからである。この意味生成の具体相は言語の「外部」に「ある」といわねばならない(ただし、「外部」も「ある」も、すでに言語による空間化と時間化を、さらにはこの具体相の存在論化を意味する限り、適切ではないのだが)。この原初的具體相が形象化不可能な意味の「現象学的基盤(base phénoménologique)」をなしている。言語「外」にある本質が言語によって引き裂かれるとき、「原-形象化可能性(proto-figurabilité)」が開かれる。リシールは「この原-形象化可能性を<純粹>空想(phantasiai <pures>)あるいは空想の現出」と呼ぶ(Richir[2008b],20)。この基盤においてファントムの「原所与性」が与えられ、変幻自在な空想が交錯し合う。意識生の働きとはこの交錯し合う空想現出に他ならない。「純純空想が意味の発端を担っている」(ibid.)のである。したがって、厳密に言えば、形象化不可能である以上、空想には像が欠如している。「野生の領域」における具体性とは形象化不可能性に他ならない¹⁰。現象学的に具体的なもの、すなわち「事象そのものの」とは、不安定な空想領域において生まれつつある意味である。だが、いかにしてそのような形象化不可能な具体相に近づくことができるのか。

知覚とファンタシアではその現出形式は異なるが、両者によって与えられる内容は同じである¹¹。例えば、マドンナの画像のイメージは現実私たちに前にある。マドンナ像が生き生きとした現実性(実在性ではない)として現存する限り、それは知覚されている—この現実性は、しかし、「かのよように」の現実性であり、ただ知覚的に思い浮かぶだけでしかないのだが。

単なる虚構として空想された個体とは「純粋な可能性」でしかない。現実性自体は可能性ではないが、しかしそれ自体のうちに純粋な可能性を含んでいる。それゆえ空想が現出するためには、ただ現実性の措定作用が中和化されればよい。

知覚内容と空想内容は均等の意識において合致する。原理的には可能的空想はあらゆる現実的経験に対応しうるがゆえに、知覚内容と空想内容の合致は、現実性と可能性との区別とは無関係である。等しいものは現実的でもあれば可能的でもありうるからである¹²。ここに変様されないもの（知覚）と変様されたもの（ファンタシア）との等しさが決定的に存在する。

フッサールは「知覚的空想 (perzeptive Phantasie)」という概念を導入する (XXIII, Text Nr.18)。これは矛盾した概念ではない。この概念における「知覚」とは像物体の *Wahrnehmung* ではなく、像客体の *Perzeption* であり、後者は実在を措定しない、いわば中和化された知覚だからである。リシールによれば、「この特殊なファンタシアにおいて何ものかが知覚 (*Perzeption*) > されているのだが、その何ものかは (*Wahrnehmung* において知覚される) 実在的なもの (*le réel*) と (想像力の志向的対象である) 虚構的なもの (*le fictif*) の彼方 (あるいは手前) にある」(Richir[2008b],15) という。「実在的なものと虚構的なものの彼方あるいは手前にある」もの、それは具体的には何を意味するのか。

7 空想自我と空想身体の現出

原初的領域における他者身体の構成は像意識における像の構成とは同じではありえない。他者の身体は彫像のような物体 (*Körper*) でもなければ、虚構 (*fictum*, *Bildobjekt*) としての身体物体 (*Leibkörper*) でもなく、「生き生きした身体 (*Leib*)」、厳密にいえば、「生き生きした身体物体」だからである。すなわち、そこにある物体が他者の生によって住まわれているという「生き生きした身体性 (*Leiblichkeit*)」こそが他者身体のコアをなしているのである。だが、私の内的知覚はこの「生き生きした身体性」を直観できない¹³。なぜなら他者の「生き生きした身体物体」を統覚できるのは、それが他者によって内側から住まわれている場合だけであり、この他者の生こそが他者の身体に「生き生きした身体性」を与えているからである (Richir[2006],35)。像意識によって捉えられた他者身体と彫像との間に違いはない。そこにはこの身体性が欠如しているからである (Richir[2000],145)。したがって、原初的領域への還元において「他者」を自己の一変様としてしまったというフッサール批判は、この像意識による他者経験の説明—すなわち類比的統覚—に向けられている限り、正しい。したがって、他者身体のコアは、像意識とは別の準現在化作用である「知覚的空想」の働きにその可能性が求められねばならない。

私の空想の中には「巨大な中国人たち、その足元には愛らしい小人たちがおり、小さな樹々がある」(XIII,299/[2015]三六一)。とすれば、空想においても多様な現れは私によって統一されているのであり、したがって、私は「空想世界 (*Phantasiewelt*)」に「空想自我 (*Phantasie-Ich*)」(ibid.,298/三

五九)として「必然的にそこに居合わせている」(ibid.,291/三四五)のでなければならない。この現れの統一は、「方位性の零点」である私の「空想身体(Phantasieleib)」(Richir[2000],137)を基とし、これを参照軸として巨人、小人、樹木が現れている。「空想世界にはいかなる想起も、この世界を打ち消すいかなる経験の動機もない限り、それは空虚な可能性としてある」(ibid.,298/三五九)。知覚に拘束されない空想において、事物は特定の時間空間に規定されることはない。したがって、現れの参照軸である「空想身体」もまた厳密には「いま・ここ」に与えられることはない。「空想身体」も「空想自我」も特定の時間空間に規定しえない空虚な可能性でしかないからだ¹⁴。それゆえ「完全に空虚な可能性」である空想世界において「諸物の一つに客観的に位置づけられうるような物体身体性(Körperlichkeit)はすべて剥奪され、生き生きした身体性(Leiblichkeit)が現出する」(Richir[2000],137)。とはいえ、この身体性はいまだ規定されてはいないのだが。

空想身体には運動感覚(kinesthèse)が伴っている(ibid.,140)。空想風景のなかを私は歩み、その足跡を私は見る。空想身体と実際の身体の「覆い合い(Deckung)」、この空想経験は現実だが、しかし実際に私の足が動くわけではない。空想においてはまるで身体(Leib)が物体(Körper)から分離されたかのように一切が生じているのである(ibid.,141)。にもかかわらず、空想身体と身体物体の覆い合いが生じうるのは、キネステーズが作動しているからである。すなわち、両者の間に一種のミメシスが、像を媒介した鏡像的ミメシスとは全く異なる身体の能動的ミメシスが機能しているのである。

私はつねに感覚野を有し、この感覚野は充たされているのだから、私の実際の感覚野が刺激されれば私は必ず感覚野を表象することになる。ある種の覆い合い(Deckung)、横滑り(Überschiebung)が生じているのだ。だから他者の手を見るとき、私は自分の手を感じ、他者の手が動くと、私は自分の手を動かしたくてたまらなくなる、等々。しかし私は他者の生きた身体(Leib)の中に私の内的経験を、像の形において(Verbildlichung)あるいは他の形において、転移させているのではない。(XIII,311f./[2015]三八三)

主観の私的 inner 面性と見なされていた空想が、いまや空想自我と空想身体を経由して、他者へと横滑りして私の空想身体と他者のそれとが覆い合う。ここに感情移入の原型が垣間見える。感情移入は類推論ではない¹⁵。だが、感情移入というべき身体の能動的ミメシスはどのようにして作動しているのか。形象化不可能なもの(空想)はいかにして形象化可能なもの(想像)に転化しうるのか。

8 感情移入と建築術的位相転換

フッサールは感情移入を想像力による変様(la modification par l'imagination)として捉えたがゆえに超越論的独我論との批判を蒙った。しかし感情移入は想像力による変様ではない。それは空想作用(la mise en jeu de la Phantasia)による変様なのである(Richir[2006],36f.)。

空想作用による変様によって、「生き生きした身体」はつねに同時に「空想身体」でもある (ibid.,37)。「空想身体は身体物体 (Leibkörper) から分離した生き生きした身体 (Leib) 以外の何物でもない」(Richir[2000],277) からである。空想身体は「そこへ行く」のではない。「そこ」を「ここ」の単純な変様として描き、「そこ」を通して私は他者の体験を空想する。現在に属する絶対的「ここ」から、距離をおいて、すなわち空間化しつつ、「そこ」にある絶対的ここ (他者) の非現前を、その内側から空想による「能動のミメシス (une mimésis active)」(Richir[2006],38) によって感受するのである¹⁶。このミメシスは鏡像ではない。それが感受するのは、他者の空想身体の生であり、この生は形象化できないからである。「生き生きした身体性」とは、身体が内側から生きられているということの意味する限り、それは必然的に感情と分かちがたく結びついている (ibid.)。生を触発しているのは感情 (さらにはその底にある欲動) に他ならない¹⁷。「感情性 (affectivité) が空想と生き生きした身体性の不可欠な部分をなしている」(ibid.,39) のである。この感情性を基盤として、その上に空想作用の変様としての感情移入が成立する。他者身体の「生き生きした身体性」という形象化できぬものへの眼差しは、この空想作用によって可能となる。

原所与性としてのファントムを基盤として空想が作動し、空想作用によって想像力が起動する。ところが、ひとたび起動した想像力は空想作用が意味生成の次元で垣間見た形象化しえぬものをおのれの直観対象として形象化するために、空想を「知覚的外見 (apparence perceptive)」に変様せざるをえない。すなわち、想像力は自ら疑似措定した対象の「像 (image)」を横断して志向的に思念するのだが、この「像」はももとの純粹空想の「原 - 像」¹⁸ではなく、志向的に思念された対象の像なのである。これが空想から想像への「建築術的位相転換 (la transposition architectonique)」(ibid.,40) の機制である。この位相転換を逆に辿れば、知覚的空想が可能となる。知覚的空想の本質は現実の知覚 (Wahrnehmung) を空想に (想像ではない) 変様することにあるからだ。空想はつねに想像力によって汚染される危険に晒されている。意味生成の具体相へ身を投じる場合、この危険を回避するためには、想像力の志向性それ自体を根源的に遮断しなければならない。想像力によって変様されていなければ、原初的領域における感情移入が開かれるだろう。感情移入は想像力による変様ではなく、空想作用による変様だからである。空想は像化された表象ではありえない。想像力によって像化された場合、空想は鏡像と化してしまうからだ。それゆえ感情移入による他者身体の統覚は、像意識におけるような「あたかも」の統覚ではありえない。他者の身体があたかも私の身体の鏡像 (私の一変様) であるかのように現出すると捉えたことによって類比化統覚は失敗したのである。

それではその感情移入は具体的に知覚的空想を通してどのように遂行されているのだろうか。フッサール自身は知覚的空想の事例として『リチャード三世』を挙げている (XXIII, 515)。リシールは俳優によって「受肉した」登場人物 (リチャード三世) のうちに感情移入の具体的遂行のかたちを見て取る。

リチャード三世は、舞台上で空想において＜知覚（perçu）されて＞いる、劇場という別の＜空間＞のなかで、しかも俳優に属する身体（corps）や彼が発した言葉の知覚（Wahrnehmung）の彼方で。だが、それは俳優が生み出す＜知覚的＞外見として現れ、想像力に訴えかけるようなもののいわば手前で、知覚されているのである。…ここでは実在的なもの（le reel）は、演劇表現を撤廃してしまうような実在性（réalité）と＜空想的なもの（phantastique）＞（これは想像的なものではない）との間で無限の移行状態にある。…俳優は自らの身体物体（Leibkörper）を消去し、その演技によって登場人物の中へ移行する…換言すれば、彼は登場人物の逆説的な感情移入（Einfühlung）を＜遂行する＞。…この感情移入は（事物の）知覚でもなければ（対象の）想像でもなく、空想において空想によって遂行されているのである（この空想ゆえに、私たちは空想身体（Phantasieleib）について語れるのだ）。この感情移入がすでに直観的には形象化できない他者の内面性の＜知覚的＞空想なのである。…俳優は直観的に形象化できないリチャード三世を空想において＜知覚し（perçoit）＞、…自らの身体性（Leiblichkeit）と空想身体性（Phantasieleiblichkeit）の演技を通して観客に＜知覚的＞空想を促す。舞台上の俳優の空想における＜知覚（perception）＞を媒介として観客はリチャード三世を空想において＜知覚する＞のである。（Richir[2008b],15ff.傍点強調は引用者）

舞台上とはいえ、登場人物の内面性は直観において形象化不可能であることは、現実における他者との出会いと変わらない。他者の眼差しは、私の眼差しを覚醒させる。私は他者の顔とその身体物体性（Leibkörperlichkeit）を形象化できる。この形象化可能性を横断して、私は他者の生き生きした身体性を一ある隔たり、直観における形象化可能なものと形象化不可能なものとの隔たりによって一内側から「感じる（fühlen）」ことができる。というのも、私が他者の生き生きした眼差しの「核心部」に「知覚する」もの、それは他者の形象化不可能な知覚的空想だからである。情動を媒介して両者の知覚的空想が絡み合う。「根源的に形象化不可能なものは＜知覚的＞空想において＜知覚されて＞いるのである」（Richir[2008b],18）。知覚的空想において「実在的なものと虚構的なものの彼方（あるいは手前）に」において知覚（Perzeption）されている何ものか、それは「根源的に形象化不可能なもの」、他者の「生き生きした身体性」に他ならない¹⁹。

おわりに

意識の根源的具体相における「野生の領域」は「言語の外側」にある限り、形象化不可能なものにとどまる。それを像として現出することを可能にするもの、それが建築術的位相転換であった。具体相における未規定な空想が想像力によって像として規定されるとき、像意識に対象が現出する。位相転換とは、空想の想像への変様なのである。それゆえ事象そのものとしての形象化不可能なものは、像として現出する限りにおいて現出せず、像として現出しない限りにおいて現出するという逆説を孕

んでいる。この現出せざるもの、形象化不可能なもの—他者身体の生き生きした身体性—への接近を可能にするもの、それが「知覚的空想」であった。その本質的働きは、想像力の志向性を遮断し、いわば建築術的位相転換を遡及し、知覚（実在）を空想（虚構）へ変様することにあった。

「感情移入」とはこの「知覚的空想」の働きであり、この働きによって根源的に形象化不可能な他者の生き生きした身体性への坑道が開かれる。「感情移入」とは「私」から「私の一変様としての他者」への推論ではない。確かにフッサールは述べていた、「他者は、現象学的には私の自己の〈変様〉として現れるのだ」と。しかし彼は急いでつけ加えていう、「(私の自己が〈私の〉というこの性格を受け取るのは、ここで対になることが必然的に現れて、対比が行われることによってである)」(同書)と。自己の人称性は「対化」に先立っているのではなく、「対化」によって初めて可能になるということがここで明確に述べられているのである。「対化」によって形象化不可能な領域に亀裂が走る。この裂け目から「原 - 形象化可能性」(Richir[2008b],20)が開かれる。換言すれば、自己と他者の等根源性而非対称性は「対化」によって根拠づけられるのである(坂本[2009],229f.参照)。

「共現前」とは「知覚的空想」の次元における他者身体の現出である。そこでいまだ「私の」あるいは「他者の」と規定できない複数の空想身体間で感情の交流が、すなわち「感情移入」が生じている。ヘルトが批判したファンタシアと想起の「混淆」、テンゲリーが指摘した潜在性而非現実性の「意味の揺れ」とは、この「知覚的空想」に関わる逆説に由来していたのである。

こうしてフッサールの像意識論を身体論として捉えるならば、次のようにいえよう。知覚(Wahrnehmung)は他者の身体を像物体(Körper)として、像意識はそれを像客体・像主題として統握する。像意識において機能しているのは志向的想像力であり、その働きは対象を「像」化することにある。それゆえ像意識において現出する他者の物体身体(Körperleib)には、生き生きした身体性(Leiblichkeit)が現れることはない。身体(Leib)と物体(Körper)の差異は、この身体に宿る生にこそ求められるのだが、この生は形象化不可能だからである。形象化不可能ものの次元、それは意味発生の原初的領域であり、そこではじめて現象が現象化する意識の最古層の次元に属する。知覚的空想によってこの次元への接近の可能性が開かれる。ただし、空想はつねに「像」に位相転換される危険に晒されているのだが。

表 像意識と身体

表 象	像意識	身 体	現 出
現在化 (Gegenwärtigung)	知覚 (Wahrnehmung)	物体としての身体 (Körper)	形象化可能
準現在化 (Vergegenwärtigung)	想起・記憶 (Erinnerung)	物体身体 (Körperleib)	
	志向的想像 (Phantasie)		
	知覚的空想 (perzeptive Phantasie) ↓	生ける身体 (Leib) 空想身体 (Phantasieleib)	建築術的位相転換 ↑
	<純粹>空想 (phantasia «pure»)	生き生きした身体性 (Leiblichkeit) 超越論的間身体性 (intercorporité transcendante)	形象化不可能

超越論的間身体性は、現象の基盤—意味生成の場—であり、そこに言語や想像力は介入しえない。それゆえ超越論的間身体性は事象そのものとしては形象化不可能にとどまる。形象化不可能なものは想像力による像化（建築術的位相転換）によって形象化可能となるが、形象化されるや否や、事象そのものはすでに像に変様されてしまっている。自己および他者の生き生きした身体性が現出するのは、この意味生成の具体相においてであり、そこで複数の空想身体が戯れ、意味が発生する。想像力の措定から解放された「知覚的空想」によってこの生き生きした身体性を知覚することができる。知覚を空想へと変様するこの「知覚的空想」こそがフッサールが「感情移入」と呼んだものであり、具体相における空想身体の共存こそが「共現前」に他ならないのである。したがって、形象化不可能な超越論的間身体性は、現れる限りにおいては現れず、現れない限りにおいて現れる。ここに超越論的間身体性の逆説—その近さと隔たり—がある。

註

- 1 ドイツ語 Phantasie の訳語は「想像」が一般的である。確かに「想像」も「空想」も準現在化作用である限り、違いはない。「想像」のうちに「空想」は包摂されているからである。しかし、後に見るように、その措定性に注目するとき、その決定的差異が浮き彫りとなる（以下 II-4 および註 5 参照）。本稿では Phantasie が「想像」と「空想」の両義性を含意する場合には「ファンタシア」と記す。古代ギリシャ語「φαντασία (phantasia)」に由来するこの語は、本来「知覚判断」(プラトン)、「感覚的現れ」(ストア派)など、「経験世界に直接かかわる認知能力」を意味していた。それが今日では「想像」「空想」など経験的世界から「最大限の距離をとる能力

- へと変貌を遂げた」。その歴史と意義については中畑 [2011] (IV章) が詳しい。
- 2 このような知覚とファンタシアの区別は、ヒュームにおける「印象 (impressions)」と「観念 (ideas)」の区別と重なる。知覚はすべて「印象」(「初めて心に出現した感覚・情緒・情感」と「観念」(「思考や推理において淡い像 (the faint images)」と化した「印象」) に分けられるが、両者の差異は心を打つ「強度と生彩の程度 (the degrees of force and liveliness)」でしかない (ヒューム [2006],(一) 27)。布伦ターノは心的現象の特徴として「志向的内在」(志向性) を発見するのだが (Brentano [1995],88)、彼自身はこの概念の先駆けをアリストテレスのうちに見出している (ibid. fn.; 中畑 [2011],193f.)。そのアリストテレスは感覚、表象 (ファンタシア)、思想を以下のように位置づけていた。「それ (表象) は感覚なしには生じない、またこの表象なしには思想は生じない」(アリストテレス [1968],427b10)。布伦ターノもまた思想史の底流をなすく感覚 (印象) — 表象 (ファンタシア) — 思想 (観念) > という因果的系列に与していたように思われる。註15参照。
 - 3 『イデーニ II-I』 訳注(10) (同書二一九) によれば、「通常 *Wahrnehmung* には知覚される対象の有体性と信憑性が含意されていて、その知覚を真正だと思っているが、しかし信憑性を除外して知覚という場合もあり、その場合を特に *Perzeption* という」(XVI,16,48f.)。実在する世界における対象の知覚が *Wahrnehmung* であるのに対して、空想世界における知覚行為が *Perzeption*、厳密には「知覚的空想 (*perzeptive Phantasie*)」である (澤田[2010],122)。外的対象を意味する「知覚 (*Wahrnehmung*)」(パークリー「存在とは知覚である (*esse est percipi*)」) に対して、フッサールが「*Perzeption*」を用いるのは、「内在的知覚 (*immanente Wahrnehmung*)」の明証性を示すためである (『間主観性の現象学 II その展開』 訳注 [28])。
 - 4 像意識の基本構造については金田[1990], 80-113が詳しい。
 - 5 ここで想像と空想との区別が明確となったので、これ以後、想像と区別される限りでの狭義の *Phantasie* を「空想」と訳し、想像と空想の意味が含意される広義の *Phantasie* はこれまで通り「ファンタシア」と記す。
 - 6 以下は吉川 [2003] の「ファントム」解釈に依拠している。
 - 7 「原所与性」である限り、ファントムは作用ではありえないが、雑多な感覚でもありえない。それはいわば生まれつつある意味を準備する「感覚図式」(IV, 四四) であり、それが懐胎する「意味」を様々な統握が充実あるいは付与することにより、意味生成が成立する。その成立過程のうちに空想作用および後述する「建築術的位相転換」や「知覚的空想」も含まれるのである。
 - 8 ファントムの実在性と物質的事物の客観的存在を意味する実在性とは区別しなければならない。後者は「実在化統握」によって成立するが、前者は「実在化統握」以前の位相にある。その限りで、「先 - 実在」と呼ばれるべきであろう。ただし、この位相は純粹空想が変幻自在に遊動する形象化不可能な「空間」であり、「知覚的空想」によってしか垣間見ることはいえない。以下 III-6 参照。
 - 9 私たちはこの「空虚な可能性の地平」が開かれるひとつの場面を、他者経験の障害に苦しむ自閉症患者と治療者との「非対象化的無関心的沈黙」(松尾[1987],32f.) のうちに垣間見ることができる (坂本[2009],240 ff.)。
 - 10 「形象化不可能なものもとても具体的でありうる。形象化可能なものよりもより具体的でさえありうることもある。具体的ではあるが、多くの場合、仮想的 (*virtuel*) かつ影響力があり (*wirksam*)、実在性 (*Realität*) とは隔たっている」(Richir[2008b],12)。
 - 11 個体を与える意識はすべて直観的であるが、しかし直観的意識がすべて現実に個体を与えるというわけではない。知覚のように現実的に与える場合もあれば、ファンタシアのように疑似的に与える場合もあるからだ。そしてフッサールはいう、「ファンタシアにおける直観対象は個的内容であり、その内容はまさしく現実的経験

- において直観される内容と同じものである」(XXIII,506)。
- 12 空想内容という意味での「非現実性」を現実性の否定と混同してはならない。鎖角の場合のように、現実性が否定されるためには、一つの現実的経験が他の現実的経験と抗争し、一方が残り他方が廃棄されねばならない。しかし空想の場合、現実性ははじめから排去されている。抗争する二つの統覚(知覚とファンタシア)は、相互並行的であったり、妨げ合ったりすることはありうるが、阻止や邪魔が「遂行」されているわけではない。したがって、「虚構物という意味での非現実性は現実性の否定ではない」(XXIII,508)。それは「現実であるかのような」経験であり、現実の肯定、否定、反駁などの「遂行」ではなく、「中立的」なのである(小熊[2017],12)。
- 13 「他の物(的)身体(der fremde Körper)、例えばそれに属する他者の手に関して、私は確かに、身体としてあるいは人間としての統覚において、心的な状態や人間的心的性質を共に統覚している。しかし、それらは与えられるのではないし、与えられることはありえない」(XIII,22/[2012]二四七)。事物知覚と異なり、他者の身体知覚の場合、その心的なものや他者の運動感覚は、「私には原本的な所与に至ることがありえず、根本的にありえない。…それは準現在化という仕方以外には現出せず、したがって原理的には本来的な知覚において知覚されることはありえない」(ibid.,47/二七一f.)。
- 14 「空想自我」および「空想身体」の時間空間における未規定性は、「空想世界」に限ったことではない。それは絵画および演劇鑑賞の際にも経験しうる。例えば、ある画廊の中で一枚の風景画の前に立つ私は、ひとりの「経験的自我(ein empirisches Ich)」であり、その現前は「いま・ここ」として規定できる。経験的自我の視野には、壁に掛けられた風景画(像物体)のみならず、画廊の窓の外に広がる市街風景も入ってくるだろう。しかし風景画(像客体)を鑑賞している私は、描かれた風景に魅了され、そのなかにひき込まれ、いまや風景の一部(アспект)と化す。描かれた風景がもつぱら私の視野に広がり、画廊の壁面も窓外の市街風景も遮断されている。この風景の一部をなす私の自我(「相関自我(das Korrelat-Ich)」、こままさに「純粹空想-自我(ein pures Phantasie-Ich)」であり、その生き生きした身体性(Leiblichkeit)と人格性(Persönlichkeit)は未規定)なのである(XIII,300f./[2015]三六三)。演劇鑑賞においても同じことがいえる。註19参照。
- 15 類推論の淵源はヒュームの「共感(sympathy)」に求められよう。「他人のいかなる情緒も直接には[我々の]心に現出しない。我々はただ、他人の情緒の原因或いは結果を感知するだけである。これらから我々は情緒を推論する(infer)。従って、これらが我々の共感を生起するのである」(ヒューム[2006]:(四)186)。こうして他者の感情はその結果(表情や会話)を通して「観念」として私たちに伝えられるのだが、この「観念」はただちに「印象」に転換されて強度を増し、他者のそれと等しい情念そのものとして、私たちのうちに生み出されるのだという(同書(三)70)。したがって、「共感」とは「類似」と「接近」を媒介とする「観念」の「印象」への転換(conversion)に他ならない。このような因果論的類推説は自己の感情の他者への投影にすぎないという批判を免れないだろう。リップスはこれを批判している、感情移入は推論ではなく、「それ以上還元すべからざる本能によって起こる」(リップス[1934],97、傍点強調は引用者)のだと。そして結論する、「諸々の他我とは本能的な、一定の感性的知覚により引き起こされた同時にその性質に従って変形された、私自身の多数化の結果なのである」(同書98、傍点強調は引用者)。この結論は、それによってフッサールが批判されることになる「自己の一変様としての他者認識」を、さらに「共感(Empathy; Einfühlung)」の土台をなすという「ミラーニューロン」の働きをも彷彿させる(イアコポーニ[2009],138f.)。フッサールがリップスを批判するのは、「感情移入」の根拠を「説明のできない本能(die unerklärlichen Instinkte)」に基づき、それ以上詳論しなかったからである。フッサールにとっては、リップスの「本能」は「現象学的な無知の避難所(ein Refugium

- der phänomenologischen Ignoranz)」でしかない (XIII,24/[2012]二五〇)。「ミラーニューロン」による内的模倣に関しても、それが「鏡像的ミメシス」でしかない限り、「自己の一変様としての他者認識」の次元にとどまっており、自己と他者の等根源性と非対称性の根本的解明には届いていない。註16参照。
- 16 「能動的ミメシス」における「能動性」と「ファントム」における「受動性」とは一見矛盾するように思われるかもしれない。確かに「ファントム」が感覚よりも根源的な原所与性の次元にある限り、志向的意識の「能動性」が関与する余地はない。しかし「能動的ミメシス」の「能動性」は、そのような意識の「能動性」とは次元を異にする。鏡像が知覚的実在を再現する限り、「鏡像的ミメシス」とは知覚対象を原本とし、それに従属する「二次的」という意味で「受動的な」能力でしかないだろう（これに対して「ファントム」の受動性とはそのような意味での「二次性」ではなく、「原所与性」を意味する）。そのような「二次的受動的」なミメシスに對置されるミメシスの「能動性」とは、既成の「受動」と「能動」の対立の手前にある空想世界に属するキネステーゼの働きを特徴づけているのである。その働きとは、「空想自我」と「空想している現実の私」の、さらには、私の身体と他者の身体とのあの「覆い合い (Deckung)」に他ならない。この1914-15年のテキスト (XIII Text Nr.10) における「覆い合い」が、晩年 (1931年) の『デカルト的省察』において「対化」と呼ばれることになる（「覆い合い」と「対化」に関しては坂本 [2009], 233;243 ff.;251 参照）。したがって、「能動的ミメシス」の「能動性」と「ファントム」の「受動性」とは矛盾するわけではない。
- 17 感情および欲動を形象化するためには、言語による制度化（創設）と想像力による形象化が求められる。ただし、ここでの言語とはすでに出来上がった対象の意味を志向する言語 (langue) ではなく、意味生成の場で原創設される言語 (langage) であり、それゆえ身体 (Leib) と切り離しがたく結びついている。私たちはその事例を「身体言語 (Leibsprache)」において確認することができるだろう。恋人との交際を母親から禁じられた女性患者をおそう食欲不振や嘔吐は、この禁止命令を「のみこむことができない、吐き出さざるをえない」という「身体言語」であった (荻野[1988],159;ビンズワンガー[1967],198 ff.)。この身体表現を「たんなる隠喩にすぎないと考えてはならない」(ビンズワンガー, 同書201)。というのも、「<隠喩 (métaphorique)>が問題となるのは、あらかじめ身体の外に思考を位置づけて…身体の言語 (le langage du corps) をそこに転-移する (trans-férer: méa-phore) 場合だけでしかない」(Richir[1993],23/三九) からである。「思考は根本的に身体の痕跡を担っている…身体なき思考などない…思考は身体に受肉した思考だからである」(Richir[1993],23/三九)。
- 18 意味生成の次元で空想が感受するものは、いまだ未規定で形象化できぬもの、すなわちいまだ「像」化しえぬものであり、それが想像力の媒介によって位相轉換されたとき、「像」が成立する。想像力の媒介以前にあるこの次元における形象化しえぬものを便宜上「原-像」と記しておく (坂本[2009],238f.参照)。
- 19 フッサールは「リチャード三世」の事例を挙げているが、台詞が支配的な西洋世界の「劇」よりも身体を重視する「能」舞台の方が、「知覚的空想」の働きは捉えやすいように思われる。とりわけ、「夢幻能」ではすべてが「虚構」であり、「実在」は一切措定されていないからである。確かに観衆が知覚 (Wahrnehmung) しているのは、物体としての現実の舞台装置であり、演じる役者の現実的「身体」である。しかしこれらの「実在」を通して、観衆は「虚構の舞台」(空想世界)と役者によって演じられる登場人物の「虚構の身体」(空想身体)とを「知覚 (Perzeption)」している。この実在と虚構の覆い合いから「夢幻」(空想)が生じ、能舞台という意味生成の現場に参与できるのである。その意味で、クローデルがそのエッセイ「能」の冒頭で指摘した能舞台に到来する *quelqu'un* とは、他者、厳密に言えば、他者の空想身体に他ならない (クローデル[1988],117)。

引用・参考文献

E.フッサールについては、全集巻数をローマ数字、原書頁数をアラビア数字/訳書頁数を漢字で示す。例(XXIII,123), (IV,一二三)

Husserliana: Edmund Husserl-Gesammelte Werke

Bd.I:『デカルト的省察』浜渦辰二訳、岩波文庫、2001年(*Cartesiansche Meditationen und Pariser Vorträge*, Martinus Nijhoff, The Hague, 1973)

Bd.IV:『イデー II-I』立松弘孝・別所良美訳、みすず書房、2001年(*Ideen zur einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*, Zweites Buch, Martinus Nijhoff, 1952)

Bd. XI:『受動的総合の分析』山口一郎・田村京子訳、国文社、1997年(*Analysen zur passiven Synthesis*, Martinus Nijhoff, 1966)

Bd. XIII: *Zur Phänomenologie der Intersubjektivität*, Erster Teil. Martinus Nijhoff, 1973

Bd. XIV: *Zur Phänomenologie der Intersubjektivität*, Zweiter Teil. Martinus Nijhoff, 1973

Bd. XXIII: *Phantasia, Bildbewusstsein, Erinnerung*, Martinus Nijhoff, 1980

ただし以下の著作はEUと略号で示す。

Edmund Husserl:『経験と判断』長谷川宏訳、河出書房新社、1999年(*Erfahrung und Urteil*, Philosophische Bibliothek 280, Felix Meiner Verlag, 1999)

なおフッサール全集『間主観性の現象学』全3巻(XIII, XIV, XV)には以下の翻訳がある。

『間主観性の現象学 その方法』浜渦辰二・山口一郎監訳、ちくま学芸文庫、2012年

『間主観性の現象学 II その展開』浜渦辰二・山口一郎監訳、ちくま学芸文庫、2013年

『間主観性の現象学 III その行方』浜渦辰二・山口一郎監訳、ちくま学芸文庫、2015年

ただしこの翻訳は原書からテーマ別にテキストを厳選して編集されており、かならずしも XIII, XIV, XV 各巻に対応しているわけではない。したがって、本文中では翻訳箇所を[発行年]ページ数(漢数字)で示す。例(XIV,281/[2013]三二)

その他の文献については、本文中で(著者名 [発行年], 頁数をアラビア数字)で示す。なお、利用させていたいただいた訳文は文体統一等のため一部変更あるいは省略させていただいたものもある。

アリストテレス[1968]:『靈魂論』山本光男訳、in『アリストテレス全集第6巻』、岩波書店

ルートヴィッヒ・ビンスワンガー[1967]:『現象学的人間学』荻野恒一・宮本忠雄・木村敏訳、みすず書房

Franz Brentano[1959]: *Grundzüge der Ästhetik*, Francke Verlag, Bern

—————[1995]: *Psychology from an Empirical Standpoint*, Translated by Antos C. Rancurello, D.B. Terrell and Linda L. McAlister, Routledge, London

ポール・クローデル[1988]:『朝日の中の黒い鳥』、内藤高訳、講談社学術文庫

クラウス・ヘルト[1986]:「相互主観性の問題と現象学的超越論哲学の理念」坂本満訳、in 新田義弘・村田純一編『現象学の展望』、国文社

デイヴィッド・ヒューム[2006]:『人性論』(四分冊)大槻春彦訳、岩波文庫

マルコ・イアコポーニ[2009]:『ミラーニューロンの発見』塩原通緒訳、早川書房

金田晋[1990]:『芸術作品の現象学』、世界書院

- テオドール・リップス[1934]:『心理学原論』大脇義一訳、岩波文庫
- 松尾正[1987]:『沈黙と自閉』、海鳴社
- 中畑正志[2011]:『魂の変容』、岩波書店
- 荻野恒一[1988]:『現象学と精神科学』、世界書院
- 小熊正久[2017]:「フッサールにおける像意識と想像」 in 『山形大学紀要 (人文科学)』第18巻第4号
- Marc Richir[1993]:*Le corps: Essai sur l'intériorité*, Hatier, Paris; 『身体—内面性についての試論—』、和田渡・加國
尚志・川瀬雅也訳、ナカニシヤ出版、2001年
- [2000]:*Phénoménologie en esquisses*, Éditions Jérôme Millon, Grenoble
- [2006]: «Leiblichkeit et phantasía», in *Psychothérapie phénoménologique*, pp.35-45 Paris
- [2008a]: «La refonte de la phénoménologie», in *Annales de Phénoménologie*, n° 7, pp.199-212; 「現象学
の鍔直し」澤田哲生訳、in 『現代思想』2009年12月臨時増刊号、青土社
- [2008b]: *Fragments phénoménologiques sur le langage*, Éditions Jérôme Millon, Grenoble
- ポール・リクール [1996]:『他者のような自己自身』久米博訳、法政大学出版局
- 坂本秀夫[2009]:『他者としての身体』、ブイツーソリューション
- [2017]:「間身体性の倫理学の構想」 in 『跡見学園女子大学文学部紀要』第53号
- 澤田哲生[2010]:「フッサール空想論の射程再考」 in 日本現象学会編『現象学年報』第26号
- Alexander Schnell[2007]: *Husserl et les fondements de la phénoménologie constructive*, Éditions Jérôme Millon,
Grenoble
- László Tengelyi[2004]:*The Wild Region in Life-History*, Northwestern University Press
- 吉川孝[2003]:「現象とファントム」 in 日本現象学会編『現象学年報』第19号